

初期近代英語期の *be* 動詞の後の人称代名詞について —イギリス・ルネサンス演劇を対象に—

井上 瞬

1. はじめに

現代英語では次に示すように、人称代名詞の主格と目的格のいずれもが、*be* 動詞の後で主格補語 (subject complement) として用いられる。

(1) It is { *I / me* }.

本来的に古英語・中英語期においては、主格のみしか用いられなかったが、徐々に目的格が使用されるようになっていった (Brunner 1962: 111; Visser 1970: 240)。このような現代英語での人称代名詞の格の選択については、19 世紀以降様々な学説が唱えられている。現代英語では目的格が主に使用されることが知られる (cf. Biber et al. 1999: 335)。

このような環境における代名詞の格の選択について、多くの記述的な研究が存在するものの、量的な研究は後期近代英語期以降を対象とするものを挙げるほかない。例えば、現代英語については Biber et al. (1999: 335-6)、後期近代英語については Nakayama (2018: 91-9) がある。

その一方で、初期近代英語 (EModE; 1500-1700) やそれ以前の状況については、いくつかの記述的な研究において記述が散見されるが、量的な研究は未だなされておらず、依然としてその詳細が明らかではない。例えば、Smith (1906: 81-2) は詩を含めた Shakespeare における目的格の主格補語の例が 8 例あるとした上で、主格の使用が圧倒的である旨を述べるに留まる。そのため、EModE 期に関して、主格補語の場合のみならず、倒置された主語の場合¹も含め、*be* 動詞の後に用いられる人称代名詞の格の詳細な状況を明らかにする必要がある。それにより初めて、目

¹ 例えば、*blessed is he/him* のようなものがこれに当たる。また現代英語でも、*there's me* のように *here/there* 構文で目的格人称代名詞が現れ、主格補語の格の議論の際に時に言及される。cf. Curme (1931: 42)。

的格人称代名詞の主格補語としての使用拡大について、通時的に観察できるようにになると考えられる。

本稿では、EModEにおけるこのような格の選択について取り扱う。特に、William Shakespeare をはじめとする劇作家による演劇から成るコーパスを対象に、網羅的な調査を行う。その上で調査結果をもとに、be 動詞の後での目的格人称代名詞の生起理由について、これまで提唱されてきた諸説を中心に、複数の観点から考察を行う。

2. 先行研究

主格補語で人称代名詞の目的格を使用するのは、EModE 期の 16 世紀末に見られるようになったとされる (Visser 1970: 239)。主格補語における目的格人称代名詞の文献上の初出について、先行研究 (Hatcher 1948: 1095-100; Visser 1970: 240-1; OED) で示されているものを、関係詞節を伴わない場合と伴う場合で各々まとめると、次の通りとなる。

表 1. 主格補語での目的格代名詞の初出年代²

	(A) 関係詞節を伴わない場合		(B) 関係詞節を伴う場合	
<i>me</i>	c1590	Greeneの <i>FBFB</i>	1672	<u>Wycherleyの戯曲</u>
<i>him</i> ³	1697	Vanbrughの戯曲	14c	<u>Sir Perceval of Galles</u>
<i>her</i>	1666	Pepysの日記	1867	<i>Ohio educ. monthly</i>
<i>us</i>	1815	Austenの <i>Emma</i>	1807	<u>Féliciteの劇の訳</u>
<i>them</i>	1577	Hillの園芸書	a1533	Marbeckの神学関係書

² 下線＝関係詞の先行詞たる人称代名詞が、後続の関係詞節中の動詞の目的語として機能するもの。太字の年代＝EModE 期。なお、目的格が主格としてもしばしば用いられていた二人称代名詞については、ここから省いた。

³ (A)に関して、Hatcher (1948: 1096, n75)は、13 世紀に書かれた *The southern passion* の 1998 行に‘I him am’という例があるとするが、その刊本の Brown (1927: 73)では‘ich hit am’とあり、Hatcher が参照したものが不明であるため除外した。

関係詞節を伴う場合の *him* を除く全ての人称代名詞の目的格について、文献上 EModE 期以降に初出例が見られる。

ここで、本稿が取り扱う *be* 動詞の後での人称代名詞の格の選択に関して、EModE に見られる構文である、< *here + to be + them/they* >⁴に触れることとしたい。この構文が用いられた例は次のとおりである。

- (2) a. an' you should, *here bee them* can perceiue it, (EMI F1: Sig. A4v)
b. *here be them* haue beene amongst souldiers. (EMI F1: Sig. F3v)
c. *Heer's them* in our country of Greece,
Gets more with begging, (Per. Q1: Sig. C2v)
d. *heere be they* will swallow any thing, (CR F1: Sig. T6v)

この構文に関して、Partridge (1953: 24)は目的格が使用された例を挙げて‘idiomatic colloquialism’であったとするが、一方で主格の使用された例である(2d)に触れて、使用される格が一貫していない旨を指摘している。目的格が用いられた類例を Spies (1897: 95)が 3 例(うち 2 例は同一作品内で連続して発話される類似した文)を挙げている他、本稿が対象外とした Jonson の *masque* から Partridge (1953: 24)が 1 例を挙げており、合計 8 例と少なからぬ例が確認されている。そのため、この構文が当時の演劇で慣用化していたと見て、本稿では特別に取り扱うこととする。

さて、先行研究で提示された目的格人称代名詞の *be* 動詞の後での使用に関する説明を見ることとする。これは、次の 8 つに大別できる。

1. 動詞の後では目的格を使用する(cf. Curme 1931: 42)
2. 非主語の役割では目的格を使用する(cf. Hope 2003: 95)
3. 異なる人物を指す場合に目的格が用いられる(cf. Partridge 1953: 24)

⁴ 多くの例で *be* が用いられていることについては、*be* が直接法現在としても用いられていた(cf. Franz 1938: 173; OED)ことによるであろう。なお、目的格の使用について、Franz (1938: 251)は *here's they* と *you'll find them* との混成とするが、不定代名詞あるいは先行詞の代名詞としての用法(cf. Partridge 1953: 24; OED)であろう。なお、このようなものについて、Jespersen (1949a: 399)は人称代名詞と呼び難い旨を指摘しているが、本稿では区別せず取り扱う。

4. 目的格の使用は卑俗 (vulgar) 表現である (cf. Jespersen 1949b: 251)
5. 関係詞牽引による (cf. Jespersen 1891: 108-10; Hope 2003: 85-6)
6. フランス語の影響による (cf. Lounsbury 1894: 274)
7. 母音の類推による (cf. Jespersen 1891: 149; Abbott 1870: 142)
8. 対格付き不定詞では目的格を用いる (cf. Jespersen 1949b: 250)

これらのうち 4. に関して、Jespersen (1891: 137) は *Tim*. における Timon の目的格の使用に、上流階級への卑俗表現の侵入があると見ている。

これらの説明はいずれも不十分であると言わざるを得ない。というのも、1. と 2. については現代語における状況に基づいた説明に過ぎず、3. についても具体的な根拠が一切提示されていない。またそれに加えて、残りの五つについても少数の例に基づく説明に過ぎない。そこで本稿は、特にこの五つの説明について量的な調査に基づいた検証を行うとともに、それ以外の要因についても探ることとする。

3. 調査方法

本稿が対象とするのは、EModE 期の口語に近い文献である、William Shakespeare ら四名による戯曲の、当時の刊本が現存する全作品から成るコーパスである⁵。その内訳は、Shakespeare が 38 作品でおよそ 91 万語、Marlowe が 5 作品でおよそ 12 万語、Greene が 6 作品でおよそ 11 万語、Jonson が 19 作品でおよそ 48 万語の、合計 68 作品でおよそ 163 万語である。これを対象として、AntConc (cf. Anthony (2020)) を用いて、be 動詞と人称代名詞の間に最大三語まで含むものを調査した⁶。

4. 分析

この調査により、be 動詞の後に主格が現れているものが 318 例、目的格が現れているものが 16 例⁷、それぞれ見つかった。これ以降、それらの例について、2 節で挙げたものの 3. から 8. についての検証を行う。

⁵ 本コーパスの詳細並びに作品名略号については、井上 (2021) を参照されたい。

⁶ 例えば、`['^A-Za-z][i]s¥s(['^s]+¥s){0,3}him` のような文字列で検索を行った。

⁷ 本来の与格である場合 (e.g. *woe is me*) は除外した。また、次の例を見られたい。

4.1 説明 3. 社会的属性と目的格の使用

この Jespersen の考えは、既に Visser (1970: 239)によって幾分偏向的である旨が指摘されている。また、Visser は Greene や Shakespeare の例に言及しつつ、様々な社会的階層の人物の発話に見られることから、文語的であるか、口語的であるか、あるいは卑俗語であるかの判断を避けている。実際、本調査の結果としても、目的格が使用された例のうち、下流階級に属する人物の発話が 3 例あるが、9 例は上流階級による発話である。加えて、下流階級に属する TGV の Lance はいずれの格も用いているほか、同様に道化の AYL の Touchstone らは主格のみを用いている。従って、be 動詞の後の格の選択傾向は、発話者の社会的階層に左右されているとは考えにくい。

また、次の(3a)の Timon の目的格の使用について、Jespersen (1891: 137)は Timon が発話時に「怒っている」状態にあることをその原因として挙げている。

- (3) a. [APEMANTUS] Art thou proud yet?
[TIMON] I [= ay], that *I am not thee*. (Tim. F1: Sig. hh3r)
- b. [MACBETH] [...] damn'd *be him*, that first cries ['hold, enough.']
(Mac. F1: Sig. Nn4r)

確かに Timon は(3a)の発話の前後で、哲学者 Apemantus のことを‘Poore Rogue’, ‘the worst of men’などと称していることから、この場面において怒っていると言えるだろう。また(3b)についても、‘damn'd be him’という台詞のみならず、Macbethと Macduffによる戦闘の場面であることから、同様の解釈が可能であるかもしれない。しかし、そのような激情をどの程度認

-
- (i) [ANTIPHOLUS] Call thy selfe sister sweet, for I am thee: (Err. F1: Sig. H4r)

この *thee* について、Franz (1939: 269)は与格と判断している他、版によっては *am* が他の語へと改変されている場合もあるが、本稿では主格補語の例として扱う。

めるかは恣意的な判断にならざるを得ず、その他の *be* 動詞の後で目的格人称代名詞が使用された箇所について、必ずしも強い感情が伴われているとは考えられない。逆に、主格の使用が見られる上流階級の発話であっても、強い感情を伴っている場合がある。

(4) a. [MYCETES] Accurst *be he* that first inuented war,

(*Tamb.* O1: Sig. B6r)

b. [COB] Humour, auant, I know you not, *be gone*. Let who will make hungrie meales for your monster-ship, it shall not *bee I*.

(*EMI* F1: Sig. D1v)

この(4a)においては、*accursed be he* とあることから、強い感情を伴っていると考えると良いであろう⁸。また、(4b)は水運びの *Cob* が捲し立てる台詞であり、*auant* [= *avaunt*], *be gone* などと続け様に発話していることから、苛立ちが明白である。これらの例は、(3)の場合と同様に考えることができる。以上より、感情の昂りと目的格の *be* 動詞の後での使用を結びつけるのは難しい。従って、Jespersen の *Timon* の目的格の使用に関する主張は、自らが卑俗な表現とした目的格の使用が貴族の発話にも見られることを、正当化するためになされていると言える。

社会的属性に関連して、登場人物の性別ごとの使用状況を見る。今回対象とした作家はいずれも男性であったために、その点において著しい偏りがある。しかし、劇中での登場人物の性別は、作品によってその比率が大きく異なる上に、全体としても男性に大きく偏っている⁹とは言えども、多様であると言える。また、EModE 期に出版された文法書において、*be* 動詞の後での目的格人称代名詞の使用は認められておらず (cf. Visser 1970: 241-2)、そのために主格の使用が規範的であると言える。また、Nevalainen and Raumolin-Brunberg (2017: 130-1)によれば、初期近代英

⁸ なお、(3b)や(4a)のような〈形容詞+*to be*+主語〉という構造の文は、ある種の祈願文または感嘆文と考えられ、強い感情を伴っていると考えられるが、主語が目的格の場合は(3b)の1例、主格の場合は18例見られる。

⁹ 参考までに、Crystal and Crystal (2020)によるデータに基づいた計算によれば、Shakespeare 作品における台詞のうち男性が 81.22%、女性が 16.97%を占める。

語期の文献において女性と男性で言語の使用傾向に違いが見られる場合があるため、男性作家の手による作品における登場人物の発話についても、それが反映された可能性が否定できない。そこで、登場人物の性別毎の、be 動詞の後における人称代名詞の使用傾向を確認する。

表 3. 使用される格ごとの性別の割合¹⁰

	主格		目的格		you		全体
男性	237	87.13%	14	5.15%	21	7.72%	272
女性	59	77.63%	1	1.32%	16	21.05%	76
その他	22	95.65%	1	4.35%	0	0.00%	23
合計	318	———	16	———	37	———	371

目的格の用例について、全 16 例のうち次のもののみが女性による発話である。

(5) [QUEEN] *ist* [= is it] *him* you seek? (Edw2 Q1: Sig. E4r)

しかし、主格と目的格の使用傾向について男女差はほとんどなく¹¹、女性の登場人物による目的格の使用が 1 例のみであることも、当時の戯曲における女性の登場人物による発話自体が少ないことによるものと言える。従って、be 動詞の後の目的格の使用は、当時規範的ではなかったものの、特定の社会的属性と結びつけられていなかった可能性が示唆される。

4.2 関係詞牽引

本節では、be 動詞の後での格の選択と、関係詞牽引との関係について考える。先に挙げた(5)の他に次の例のようなものも確かに存在する。

¹⁰ 性別の「その他」は、超自然的な存在や性別が特定できない登場人物を指す。

¹¹ なお you について、女性の発話に占める割合が高いのは当時の女性の言語使用の反映の可能性がある(cf. Nevalainen and Raumolin-Brunberg 2017: 118-9)。

- (6) [LODOWICK] *'Tis not thy wealth, but her that I esteeme,
Yet craue I thy consent.* (JM Q1: Sig. E3v)

しかし、この環境で使用された格と後続の関係詞節中の機能は、多くの場合で一致しない¹²。

表 3. be 動詞の後の人称代名詞の格と後続する関係詞節

後続する関係詞節		主格		目的格		合計
	無し	163	94.77%	9	5.23%	172
有 り	節中の主語として機能	139	97.20%	4	2.80%	143
	節中の目的語として機能	13	81.25%	3	18.75%	16
	それ以外の機能	3	100.00%	0	0.00%	3
	小計	155	95.68%	7	4.32%	162
合計		318	———	16	———	

一方、関係詞節をそもそも伴わない例が目的格の場合に 9 例あるものの、その中でも次の 2 例のように、関係詞節の想定が可能な場合もある。

- (7) a. [MALVOLIO] [‘]Besides you waste the treasure of your time, with
a foolish knight.[’]
[SIR ANDREW] *That’s mee I warrant you.*
[MALVOLIO] [‘]One sir Andrew.[’]
[SIR ANDREW] *I knew ’twas I, for many do call mee foole.*
(TN F1: Sig. Y6r)
- b. [MALVOLIO] [J]oue knowes I loue, [...] No man must know,
If this should be thee Maluolio? (TN F1: Sig. Y6v)

¹² なおそのうちのいくつかは、Brunner (1962: 112)によって指摘がなされている。

上の(7a)の2行目については、‘that’s me with whom...’のように関係詞節を想定することができることに加え、(7b)についても‘If this should be thee whom I love...’のように関係詞節を想定できる。これに類似した主張として、Jespersen (1891: 111)は、(7a)については直前の‘with a foolish night’に呼応して、(7b)については先行する‘I love’に呼応して、それぞれ目的格が使用されているという説明を試みている¹³。しかし、(7a)の4行目についても、同様に関係詞節を想定できる(i.e. ‘[...]’twas I with whom...’)ものの、主格人称代名詞が用いられていることが、これでは説明され得ない。さらに、これら以外の例については、関係詞節の想定自体もできない¹⁴。従って、関係詞牽引を目的格使用の要因として考えるのは妥当ではない。

4.3 フランス語の影響

この説については、すでに Brunner (1962: 112)や Visser (1970: 244)により、初期近代当時のイングランドにおけるその影響力の低さから退けられている。ここでは、フランス語話者の *be* 動詞の後での人称代名詞の使用に関して特別な認識が、当時の英語話者にあったかを検証する¹⁵。

目的格人称代名詞を *be* 動詞の後で使用する登場人物 16 名のうち、フランス語を劇中で使用しているのは 1 名 (*TN* の Sir Andrew) に過ぎず、

¹³ なお Smith (1906: 82)が、前者について前置詞の‘[t]he objectifying power’が Shakespeare の時代にはあまりにも弱く感じられるとしているほか、後者について先行する‘I love’が‘thee’から 6 行も隔たっていることに批判を行なっている。

¹⁴ 次の例も関係詞節を想定できるが、ある種の引用として解釈すべきであろう。

- (ii) [TRUNDLE] What trick is this, good Mistrisse Secretary,
 You’ld put vpon vs?
 [PRUDENCE] Vs? Do you speake plurall?
 [TRUNDLE] Me and my Mares *are* vs. (NI Q1: Sig. C5r)

主語における目的格の *me* の使用も、*us* に合わせたものであると考えられるが、いずれの人称代名詞も当然主格であって良いはずであるために、この例も目的格人称代名詞が *be* 動詞の後に用いられた例に含めることにする。なお、この例を挙げて、Partridge (1953: 24)は、異なる人物に言及されていることを理由とする。

¹⁵ なお、フランス語など他言語の話者の発話で、主語の位置で *me* が *I* の代わりに意図的に用いられていると考えられる場合がある (cf. Spies 1897: 96-7)。

史実においてフランスへの滞在経験があった者についても 2 名 (2H6 の Duke of Suffolk と Edw2 の Queen Isabella) のみであり、これらを合計しても全体の 2 割に満たない。一方で、相当する文で主格を使用するラテン語を劇中で発話している人物は 3 名いる。このうち一人は Duke of Suffolk で、次に挙げるようにラテン語の直後で、目的格を使用している。

(8) *Pine gelidus timor occupat artus, it is thee I feare.* (6H2 F1: Sig. n5v)

従って、話者の使用言語と人称代名詞の格の選択は無関係であると考えられる。

4.4 音の類推

当時 *me*, *thee* 及び *he*, *she*, *we*, *ye* は、Crystal (2016)によれば強勢のある場合に同じ母音を有した。そのため、この仮説は EModE にも適用可能である。そこで、*be* 動詞の後の代名詞の形態を見ることとする。

表 4. *be* 動詞の後に現れる人称代名詞の形態

		主格		目的格			合計
一人称単数	<i>I</i>	73	96.05%	<i>me</i>	3	3.95%	76
二人称単数	<i>thou</i>	17	77.27%	<i>thee</i>	5	22.73%	22
三人称単数男性	<i>he</i>	168	98.82%	<i>him</i>	2	1.18%	170
三人称単数女性	<i>she</i>	35	94.59%	<i>her</i>	2	5.41%	37
一人称複数	<i>we</i>	5	83.33%	<i>us</i>	1	16.67%	6
二人称複数	<i>ye</i>	1	2.50%	<i>you</i>	39	97.50%	40
三人称複数	<i>they</i>	19	86.36%	<i>them</i>	3	13.64%	22

上の表にあるように、*me*, *thee* が *be* 動詞の後で用いられた例は合計 8 例であり、これは *you* を除く目的格の用例の半数に当たる。とはいえ、*I* の場合に比べ、*me* の使用は特に多いと言えない。その一方で、二人称親称代名詞については、目的格の *thee* の使用が 2 割強と他に比べやや多い。

しかしながら、*me*, *thee* 以外の目的格の用例も少なからず見られる。加えて、もし音の類推が実際に働いているのであれば、*be* 動詞の後の *ye* の使用がある程度見られるはずだが、*you* が 39 例ある一方で *ye* はわずか 1 例に過ぎない。従って音の類推は、*me*, *ye* について働いておらず、目的格人称代名詞の *be* 動詞の後の使用の決定的要因とは言えない。

4.5 対格付き不定詞と格

対格付き不定詞における人称代名詞の格について、Jespersen (1949b: 250)は目的格が用いられるとしている。次に挙げる例のように、人称代名詞の格の選択には揺れが見られる。

- (9) a. [SERLSBY] Let it *be me* (FBFB Q1: Sig. F4r)
b. [MAUDLIN] And all the Forrest sweare you to *be shee!*
(Shep. F2: Sig. ²T1r)

他に当該の環境で人称代名詞が現れた例はなく、いずれが優勢かは判断できない。また、対格付き不定詞の場合の当時の規範は不明である。

[...] *I, we, thou, he, she, they, who*, doe ever governe: unlesse it be in the Verbe, *am*, that requireth the case after it, as is before it, [...]

(Jonson F2: Sig. ³K3r)

The Verb to *Be* has always a Nominative Case after it; [...] unless it be in the Infinitive Mode; “though you took it to *be Him*.”

(Lowth 1762: 105-6)

後者は対格付き不定詞の場合に目的格を規範としている。その一方で、前者は主格補語における主格の使用を念頭に置いた記述のようだが、対格付き不定詞にも適用できる。なお少なくとも Jonson は、その規範意識にもかかわらず、作品中で主格補語に目的格を 4 回使用している。

これに関連して、格と *be* 動詞の形態の関係について見る。

表 5. be 動詞の形態と人称代名詞の格¹⁶

	主格		目的格		合計
<i>am</i>	18	90.00%	2	10.00%	20
<i>art</i>	7	100.00%	0	0.00%	7
<i>is</i>	149	96.13%	6	3.87%	155
<i>are</i>	30	93.75%	2	6.25%	32
<i>was</i>	59	100.00%	0	0.00%	59
<i>were</i>	10	100.00%	0	0.00%	10
<i>be</i>	44	88.00%	6	12.00%	50
<i>been</i>	1	100.00%	0	0.00%	1

目的格の前には *be* がしばしば現れるように見えるが、そのうち 3 例については < *here + to be + them/they* > 構文であり、これを除外すると特別用例数は多くない。しかし、目的格の前で *be* 動詞の過去形と過去分詞形の使用は皆無である¹⁷ことが表より明らかである。特に過去形に関していえば、主格の前の場合が全体の 2 割強を占めることから、過去形を目的格の前で用いないのは、目的格の固有の傾向であると言って良いだろう。

4.6 考察

ここまでで、先行研究における諸説は少なくとも目的格代名詞の *be* 動詞の後での使用の決定的な要因にはなり得ないばかりか、逆にそのいずれも主格の場合に適用することが、不可能であることが示された。また次の例のように、いずれの説明によっても理解され得ないような例がある。

¹⁶ 例が見られない形態 (*being* 他) は除外した。なお命令法でなければ、*be* は原形不定詞、仮定法現在、直接法現在 (前述) のいずれかだが、主格は順に 17 例、23 例、4 例で、目的格は順に 3 例、1 例、2 例である。

¹⁷ 仮に過去形が目的格人称代名詞の前では用いられなかったとすると、少なくとも (7) の 5 行目で主格が用いられていることはこれによるものと考えられる。

(10) [MAUDLIN] *yee'are her!*

(*Shep.* F2: Sig. ²T1r)

従って、先行研究の説明はいずれも少数の例に基づく場当たりのなものに過ぎないと言える。一方で、目的格人称代名詞の前では *be* 動詞の現在形と原形以外は用いられないことが示された。なお、作家ごとの使用頻度は次のとおりである。

表 6. 作家ごとの使用頻度

	主格		目的格	
Greene	26	96.30%	1	3.70%
Marlowe	32	94.12%	2	5.88%
Shakespeare	167	94.89%	9	5.11%
Jonson	93	95.88%	4	4.12%
合計	318	95.21%	16	4.79%

作家ごとの主格と目的格の使用頻度は、概ね同じである。また、いずれの格の場合についても、各作家の用例数の割合は、コーパス全体における各作家の作品の占める割合と概ね一致するため、どの作家もいずれかの格を特別好んで *be* 動詞の後で用いているというわけではないことが明らかである。また、*be* 動詞の後での人称代名詞の使用について、目的格の場合と主格の場合で大きな傾向の違いはなく、あくまでも当該の環境における目的格の使用は、変異の一つに過ぎないと考えるべきである。

5. 終わりに

本稿では、イギリス・ルネサンス期の四名の劇作家による戯曲を対象として、*be* 動詞の後の人称代名詞の格について、網羅的な調査を行った上で、目的格の使用傾向について考察を行った。*be* 動詞の後で使用される人称代名詞は圧倒的に主格であることが改めて示された。また、先行研究の提示した説はいずれも *ad hoc* であり、EModE 期における目的格人称代名詞の当該の環境における生起要因を十分に説明できるもの

ではないことが示された。また、目的格の前の **be** 動詞は過去形が避けられる傾向にあった可能性が示唆された。しかしながら、二つの格の用例の間で、明白な傾向の違いは見られず、あくまでも当該の環境において、目的格は主格の代わりに用いられ得る、変異に過ぎなかったと考えられる。従って、今後は **be** 動詞の後の位置での目的格の使用のみに着目するに留まらず、類似の環境 (*than* の後や等位節など) における人称代名詞の使用との比較を行うとともに、主格と目的格が混用された二人称代名詞についての調査を行うなど、初期近代当時の代名詞の使用について広く調査する必要があると考えられる。

参考文献

- Abbott, E. A. 1870. *A Shakespearian grammar: An attempt to illustrate some of the differences between Elizabethan and modern English*. London: Macmillan.
[Reprinted in 2003, New York: Dover.]
- Anthony, Lawrence. 2020. “AntConc” (Version 3.5.9). Tokyo: Waseda University.
<<https://www.laurenceanthony.net/software>>
- Biber, Douglas et al. 1999. *Longman grammar of spoken and written English*. New York: Longman.
- Brown, Beatrice Daw. 1927. *The southern passion*. Oxford: Oxford University Press.
- Brunner, Karl. 1962. *Die englische Sprache: ihre geschichtliche Entwicklung*, 2. Bd., *Die Flexionsformen und ihre Verwendung*, 2nd ed. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Crystal, David. 2016. *The Oxford dictionary of original Shakespearean pronunciation*. Oxford: Oxford University Press.
- Crystal, David, and Ben Crystal. 2020. ‘Characters by part sizes’ *Shakespeare’s words*. <https://www.shakespeareswords.com/>
- Curme, G. O. 1931. *Syntax*. Boston, MA: D.C. Heath.
- Franz, Wilhelm. 1939. *Die Sprache Shakespeares in Vers und Prosa, unter Berücksichtigung des Amerikanischen entwicklungsgeschichtlich dargestellt: “Shakespeare-Grammatik”*, 4th ed. Halle (Saale): Max Niemeyer Verlag.
- Hatcher, Anna G. 1948. From *ce suis je* to *c’est moi* (The Ego as Subject and as

- Predicative in Old French). *PMLA* 63 (4), 1053-100.
- Hope, Jonathan. 2003. *Shakespeare's grammar*. London: Thomson Learning.
- Jespersen, Otto. 1891. *Studier over engelske kasus med en indledning: Fremskridt i sproget*. København: Kleins Forlag.
- Jespersen, Otto. 1949a. *Modern English grammar on historical principles*, Vol. 2, *Syntax (First Volume)*. London: George Allen & Unwin.
- Jespersen, Otto. 1949b. *Modern English grammar on historical principles*, Vol. 7, *Syntax*. London: George Allen & Unwin.
- Lounsbury, T. R. 1894. *History of the English language*, rev. ed. New York: H. Holt.
- Lowth, Robert. 1762. *A short introduction to English grammar: With critical notes*. London: J. Hughs.
- Nakayama, Masami. 2018. *Grammatical variation of pronouns in nineteenth-century English novels*. Tokyo: Hituzi Syobo.
- Nevalainen, Terttu, and Helena Raumolin-Brunberg. 2017. *Historical sociolinguistics: Language change in Tudor and Stuart England*, 2nd ed. London/New York: Routledge.
- Oxford English dictionary online [OED]*. Oxford: Oxford University Press.
<https://www.oed.com/>
- Partridge, A. C. 1953. *Studies in the syntax of Ben Jonson's plays*. Cambridge: Bowes & Bowes.
- Smith, C. Alphonso. 1906. *Studies in English syntax*. Boston, MA: Ginn & Company.
- Spies, Heinrich. 1897. *Studien zur Geschichte des englischen Pronomens im XV. und XVI. Jahrhundert*. Halle (Saale): Max Niemeyer Verlag.
- Visser, F. Th. 1970. *An historical syntax of the English language*, Part 1, *Syntactical units with one verb*, 2nd impression with corrections. Leiden: E. J. Brill.
- 井上瞬. 2021. 「初期近代英語期における命令法動詞とともに用いられる二人称代名詞について: エリザベス朝演劇を対象に」『言語科学論集』27:1-33.